

『岡田式健康法』とドイツにおける『人智学医学』との比較研究

—理論的背景、現状と問題点—

的場 主真¹ ペーター・ホイザー²

抄 録

岡田式健康法と人智学医学は成立過程、歴史的背景、基本原理が非常に似通った理論体系であり、両者とも統合医療における文脈の中で自己定義と位置づけを明確にしつつ、第三の医学の創成を目指している。本論文では、まず岡田茂吉とルドルフ・シュタイナーの哲学理論をウィルバーの統合理論を用いて概観した上で、岡田式健康法と人智学医学の両者を、健康の定義と病気の原因論を中心とした枠組みを用いて比較し、さらに両者の相違・相似点を明らかにし、それぞれの新医学理論構築に貢献しうる今後の研究課題を明確にした。日本とドイツという医学を取り巻く環境が異なり、統合医療に対する社会的認知も異なる社会システムの中で、両体系の過去・現在の状況を考察し、将来の発展のために問題点を整理し、対話を進めることは、統合医療の新しい普遍的価値と普遍的人間観を見いだすことにつながる。

キーワード

岡田茂吉、ルドルフ・シュタイナー、統合医療、ウィルバーの統合理論

1. 緒 言

日本において「統合医療」の概念がまだ定まっていない現状にある。厚生労働省の『「統合医療」のあり方に関する検討会』においては、統合医療を「近代西洋医学を前提として、これに相補（補完）・代替療法や伝統医学等を組み合わせてさらにQOL（Quality of Life：生活の質）を向上させる医療であり、医師主導で行うものであって、場合により多職種が協働して行うもの」と定義している。相補・代替医療は、この定

義に準じて、近代西洋医学と組み合わせられる医療・治療、と位置づけられていく。これに対して、ルドルフ・シュタイナーの提唱する人智学医学は「高度な統合医療」と自らを定義付け、西洋（現代）医学が相補・代替医療かという二元論を越えた「第三の医学」¹⁾としての体系化を試みようとしている。

岡田茂吉は自ら開発した岡田式浄化療法を『明日の医術』（1936）、『新日本医術』（1936）と命名し、『文明の創造』（1952）に不可欠の手段として位置づけている。さらに、一般社団法人MOAインターナショナルは「新しい医学の創成」として、岡田式浄化療法の本格的な研究・普及に取り組んでいる。この歴史的推移は、統合医療の一部としての医学ではなく、「新しい医学」の創成を目指すものである。しかしながら、「第三の医学」としての体系化は、岡田式浄化療法では始まったばかりであり、非常に大きな挑戦である。この時期に際し、ドイツにおける人智学医学の基本原理と歴史的発展推移を研究し、統合医療としての「第三の医学」の体系化を図ってきた人智学医学から学ぶべき

¹ ヴィッテン・ヘルデッケ大学文化学部
〒D-58452 ドイツ国ヴィッテン市アルフレート・ヘルハウゼン通り50

² ヴィッテン・ヘルデッケ大学健康学部
〒D-58452 ドイツ国ヴィッテン市アルフレート・ヘルハウゼン通り50

連絡先：

的場主真. TEL: (+49) 2302-1797509,

E-mail: kazuma.matoba@uni-wh.de

受付日：2013年1月7日，受理日：2014年2月22日。

ことは多いと考えられる。

本研究の目的は

- (1) 岡田式健康法と人智学医学との基本理論の類似点・相違点を明らかにする。
- (2) 人智学医学と統合医療との関連を明らかにする。
- (3) 以上の二点の結果に基づいて、岡田式健康法が「第三の医学」として体系化されるための理論的枠組みを提案する。

この研究によって、日本だけではなく国際的にも、より多くの人々が岡田式健康法に関心を持ち、その原理と治療法を理解する手助けを提供することが可能になると考える。

2. 岡田茂吉思想(伊都能売思想)とシュタイナー思想(人智学)との概略

岡田茂吉思想においても、シュタイナーの人智学にとっても、「真善美」は非常に重要な意味を持っている。この概念は本来プラトン思想の中心的概念で、人間のさまざまな「真理」の根源は、「真善美」という価値的なものの存在本質のうちにある、という考えである。プラトン以降の哲学では、「真善美」は人間の理想として、それぞれ学問・道徳・芸術の追求目標といえる、三つの大きな価値概念と捉えられている。

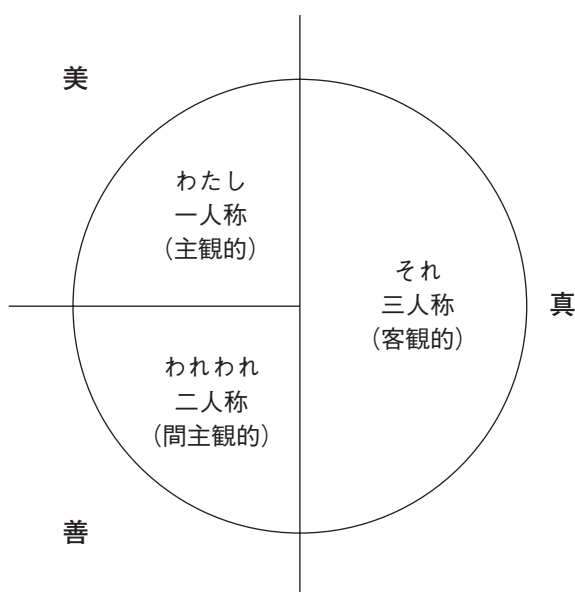


図1 人類の世界認識と真善美

ウィルバー²⁾は世界の主要な言語に共通する文法形式としての人称代名詞に注目し、人類の世界認識が第一人称(わたし)、第二人称(あなた)、第三人称(かれ、それ)に基づいていることを再確認する。ウィルバーは第二人称の「あなた」には必ず話しかけている「わたし」が伴い、「あなた」と「わたし」の共在が「われわれ」を含んでいる点に注目し、従来の第二人称の「あなた」を「われわれ」に置き換えている。さらに、この世界認識の基本的枠組みである「わたし、われわれ、それ」が「美、善、真」に対応しており、「美、善、真」はあらゆる主要言語において「一人称、二人称、三人称」の別名であることを以下のように指摘している。

三人称(それ)は、客観的な真理を指し、科学によって最もよく探索される。二人称(あなた、私たち)は、善を指す。それは私たち、すなわちあなたと私が、お互いをもてなす方法を指す。誠実に、正直に、敬意を持ってお互いをもてなすこと、言い換えれば、基本的な徳性(モラルティ)を指している。そして一人称(私)は、自己と自己表現を扱い、芸術、美学、見る者の目(アイ、すなわち「私」)に宿る美である²⁾。

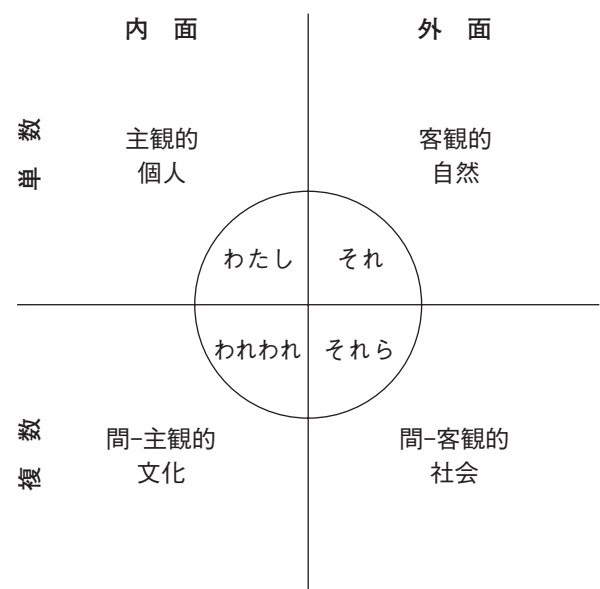


図2 世界の四つの事象

Wilber (2006)²⁾ 20ページの図を著者が改変

図1は、人称代名詞と美、善、真との関係を図式化したものである。このように、「わたし」「われわれ」「それ」という経験象限は、実際にそれぞれ「芸術」「倫理」「科学」、または、「自己」「文化」「自然」に対応しており、それぞれが美、善、真を追求していることを言及している。それぞれの三つの象限は主観的（わたし）、間主観的（われわれ）、客観的（それ）視点に基づいた次元であり、さらに間客観的（それら）視点を含めた四つの象限で世界のすべての事象（物質的、非物質的事象）を捉えることができる。（図2参照）

岡田は自らの活動の目的を「人類の三大災厄たる病貧争を根絶し、真善美の完（まった）き恒久平和の理想世界実現」であるとし、医学、農業、芸術において多くの業績を残した。彼にとって「真」とは「一厘の毫差（ごうさ）なく、不純不透明のない正しいあり方」であり、特に医学が「真理に叶っていない」のは大自然の摂理を理解していないからであると主張し、「真の医学」の確立に尽力した。また、この大自然の摂理を農業にも応用し「自然農法」を確立する。「善」とは有神論から発生したもので、その反対である「悪」は無神論が原因であると説き、人間の社会における善的心理行動は自らの霊的存在としての自覚と霊界存在の認識が条件となっている。特に個人と家庭と社会・国家と全世界との相互作用関係を重視し、個人の霊性

向上が世界の「天国化」につながると述べている。「美」に関しては、芸術の重要性を説き、その使命は「人間の情操を高め、生活を豊かにし、人生を楽しく意義あらしむる」ことにあるにあると述べ、人間の霊性向上に不可欠なものとして位置づけている。ウィルバーの理論枠組みを用いて、岡田茂吉の哲学を図3のように記述することができる。

シュタイナーは、人間の成長を7年おきに大別してとらえ、生まれてから成人するまでの21年間のうちに世界から「真・善・美」を、全身を通して理解し、その世界と自分との一体感を見だし、世界の中で自由に自律的に生きることのできる人格の育成を目指す教育を提唱する。第1七年期（0～7歳）では、子どもは周囲の大人、特に両親からの直接的、間接的な影響を全身に吸い込んで成長する。つまり無意識的にも「（私の周りの）世界は善であふれている」ことを子どもが理解するような教育を目指す。第2七年期（7～14歳）では、感情の成長が課題となり、芸術に重きを置いた教育実践によって、いきいきした感情を育み、「世界は美しい」とおぼろげにも感じられる教育を目指す。第3七年期（14～21歳）では、表象活動の活発化が課題となり、明晰な表象活動により「世界は真実に満ちている」ことをはっきり理解する教育を目指す。図4はシュタイナー哲学を図3と同様にウィルバーの

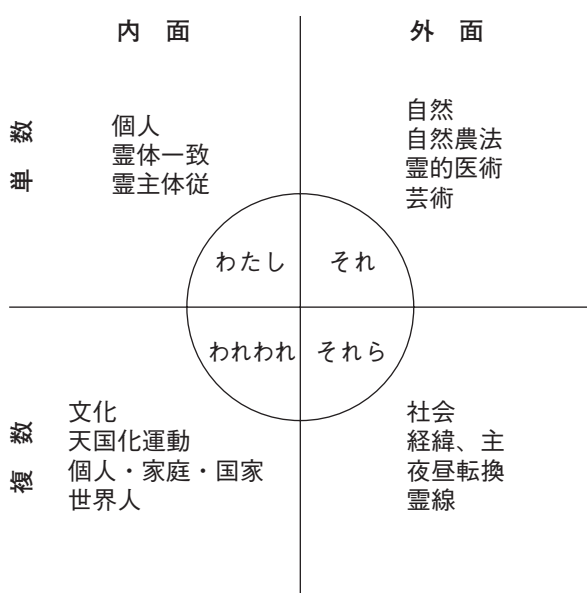


図3 岡田茂吉哲学の概観

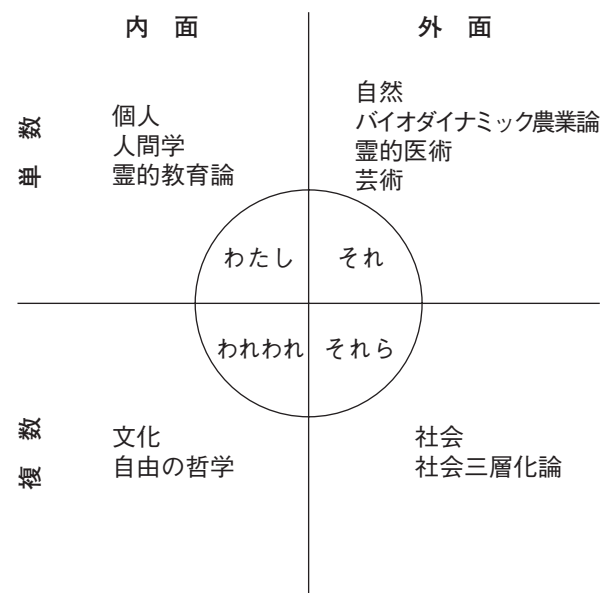


図4 シュタイナー哲学（人智学）の概観

枠組みで記述したものである。

シュタイナー思想（人智学）も岡田茂吉思想と同様に真善美の実現を目指した実践思想であり、「わたし」の考察を土台として、人間学を構築し、美的な理想的な人間の教育を目指した教育論を展開する。「われわれ」が社会、文化を形成していく時に問題になる個人の自由について考察し、さらに自然、宇宙（「それ」）を客観的に観察し、得られた経験を基に人智学医学やバイオダイナミック農業論を展開し、また、経済、政治、文化の相互関連性を根本的に問いなおして、新しい社会システム論の提案をしている。

岡田とシュタイナーの思想は、その根底に「真善美」の具現化という目標があるのみでなく、そのための実際の方法論を医学、農業、芸術、教育、政治経済の各分野で提案している。さらに、それらの方法論が非常に相似したものであるという事実だけではなく、半世紀以上を経た現在の文明の混迷期に各界から非常に注目を集めていることにも驚かざるをえない。

ウィルバーは、上記の四つの象限における主観的、間主観的、客観的、間客観的な視点を持ち、「自己と意識」と「文化と世界観」と「脳と有機体組織」と「社会システムと環境」の現象を観察・理解・経験し、さらにそれら四象限を統合する能力の養成の必要

性を説いている。このことはまさに岡田とシュタイナーが彼らの思想の中で訴えていることである。岡田は霊と体が「両方が歩み寄り、経緯（たてよこ）結んで伊都能売（いづのめ）となる」（岡田茂吉、1953）伊都能売思想を提唱し、シュタイナーは「超感覚的世界の認識」能力を高める事の必要性を説いている。

岡田とシュタイナーの思想のさらに似通っているところは、さまざまな人間、社会、自然、宇宙に関する現象を三元論的に説明している点である。本論文に直接的に関連し、両者に共通する三元論的概念として、「魂－霊－体」と「火素－水素－土素」が挙げられるが、それら以外にも、「わたし」「われわれ」「それ」「それら」から成る世界の四つの事象（図2）において、非常に似通った三元論的概念が提案されている。図5と図6は、上記図2を土台にして、岡田茂吉哲学と人智学における主要概念をそれぞれの象限ごとに列記したものである。それぞれの図における中心から外側に伸びる矢印は、人間の意識の時間的発達段階を表したもので、中心部の項目から外側の項目の順に経験・認知・理解がなされる。左上象限では、人間存在本質の意識の発達、左下象限では、人間関係の意識の発達、右上象限では、宇宙構成の意識の発達、右下象限では、社会構成の意識の発達がそれぞれ矢印で示されている。

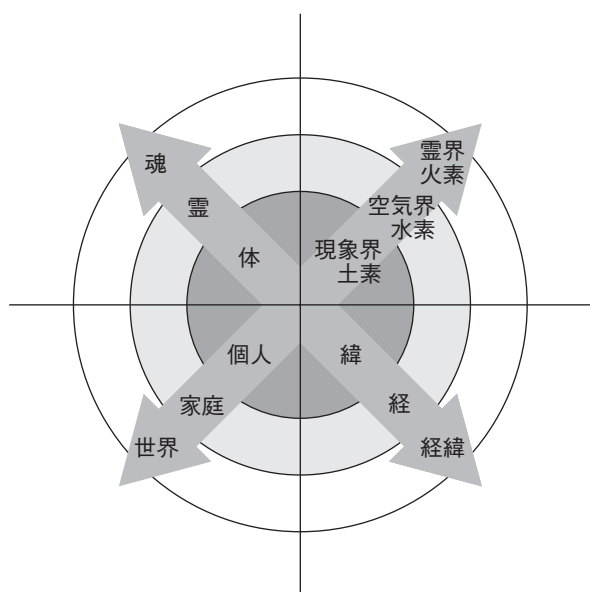


図5 岡田茂吉哲学における三元論思想

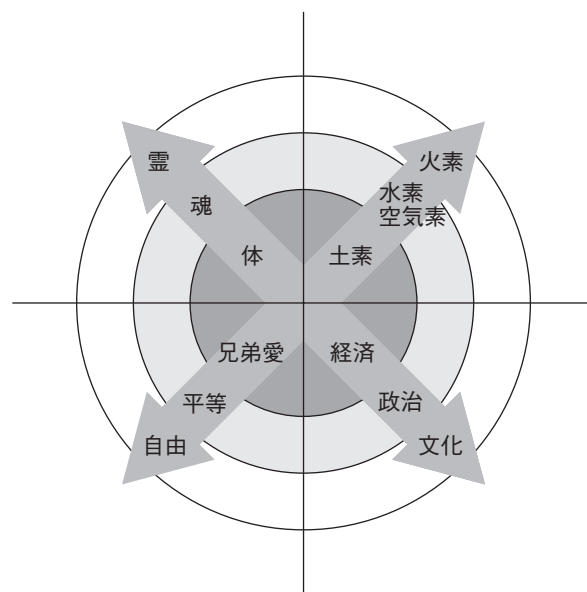


図6 人智学における三元論思想

このように非常に似通った思想が日本とドイツで生まれた時代的背景にも共通点がある。岡田茂吉 (1882-1955) とシュタイナー (1861-1925) が生きた時代は二度の世界大戦が勃発した激動の時代であり、イギリスやアメリカに遅れて産業革命を経験するドイツは、軍需産業だけでなく、医学と農業においても多額の投資をし、大きな成果を上げた。明治維新後、日本政府は欧米諸国に国費留学生を派遣しそれぞれの文化、政治、経済体制等を研究するが、特に軍事、医学、農業、教育分野ではドイツを手本とし多くの理論や技術を導入することになる。1899年にドイツ人ホフマンによって、世界で初めて人工合成の医薬品アスピリンが製造され、1913年にはドイツ人化学者ボッシュによって窒素肥料 (アンモニア合成) 開発に成功し、近代化学工業が開花し、農業が大きく変遷した。これらの技術は逸早く日本にも導入され、特に戦後の医学と農業の方向性を決定することになる。このような物質主義に偏った時代ではあったが、政治的には短期間であるが、日独とも大正デモクラシー (1912-1926)、ワイマール共和国 (1919-1933) という疑似民主主義を経験し、多くのスピリチュアルな活動が起こった。20世紀初頭、唯物主義的世界観に振り子が大きく振れようとしている風潮の中で、精神主義的世界観が対抗し始めた。まさにその時に、物質と精神の平衡を保ち、両者の統合を計ろうとした岡田茂吉とシュタイナーはお互いに会うことも、知り合うこともなかったが、この共時的現象の背後には「神の見えざる手」を感じられずにはいられない。

3. 岡田式健康法

岡田茂吉 (1882-1955) は、自然の力と叡智、すなわち自然の法則を探求する中で、この世界は、目に見える現象界 (現界) と、見えない世界 (霊界) によって構成されており、「自然力」と呼ぶ自然界 (宇宙) を満たすエネルギーを生命力の根源として、両方の世界が相互に影響し合いながら、発展、向上していること、また、人間も同じ法則の中で生きている霊体と肉体を合わせ持った存在であることを発見した。さらに、病気とは、大自然の法則のもとに秩序と調和のとれた世界へと導く、つまり、心身をより美しく健康にする

ための自然の摂理に基づく「浄化作用」であることを発見する。岡田式健康法とは、そのような原理に基づいて創り出された健康法である。

一般社団法人MOAインターナショナルは、人間の全体像を幅広い視点から捉えた、新しい考え方に基づく統合医療の啓発を進め、本来あるべき医療への歩みが進められるよう取り組みつつ、岡田式浄化療法、食事法、美術文化法からなる「岡田式健康法」を提案している。岡田式浄化療法とは、岡田茂吉が発見した自然力を活用し、人間に本来的に具わる自然治癒力を高め、心身の浄化作用を日常的に促進することによって、あらゆる苦悩を解消する心身の健康法である。この療法は、岡田茂吉が、昭和10年代より進めてきた、病気のみならず生き方をもより良くする「人間の本性 (霊性) に基づく新しい医学の創成」において、中心的役割を担ってきた。

岡田式健康法は、「療院」を中心として実施されており、東京療院 (2001年7月開設) をはじめ日本国内に11箇所、海外に6箇所が設けられている。また、岡田式健康法に賛同している医師は国内外約140名、岡田式健康法の主たる研究機関としてMOA健康科学センター (1991年6月設立) と全国4つの医療法人財団がMOAインターナショナルとともに科学的研究を進めている。

3-1 岡田式健康法における人間観

3-1-1 人体の分類：三分類と二分類

岡田は人間の「体」を上体、中体、下体の三段に分け、さらにそれぞれが上部、中部、下部に分類される³⁾。この分類に基づいて病気症状とその原因を解説し、治療箇所を指摘している。また、別の論文では上半身と下半身を首から上と下とに分け、それぞれ「天、地」と名付け、それらの中心が脳髓と臍であり、この両者が思考を司っていると解説している。人間は頭と腹の両方で考え、「両方が感應し合って考えが出るのです。吾々が考えるにも、頭や腹で考える様な気が致しますが、之は両方であるからであります。然しこの命令権は頭にあります。それは天であるからであります⁴⁾」と解説している。

3-1-2 人間の四本質

人間は「体」と「霊」の二要素から成り立ち、さらに「霊」は「精霊」と「心」と「魂」に区別され、霊すなわち精霊と心と魂の活動が意思想念であると解説している⁵⁾。

人間は霊と体の二元的要素から成立している以上、人間が生きて動いているというのは、霊と体が密合一致し、霊が体を動かしているからである。そうして霊は人体と同様の形状をなし、霊の中心に心があり、心の中心に魂がある。この三者一体の活動が意思想念となって表われ、この見えざる霊すなわち意思想念が肉体の支配者であるから、霊が主で体が従となる、すなわち霊主体従である⁶⁾。

「精霊」と「心」と「魂」の構成に関して、「精霊の中心に心があり、心の中心に魂があるので、その大きさは、心は精霊の百分の一で、魂は心の百分の一の大きさが本当である。であるから、最初、魂が動いて心が動き、心が動いて精霊が動き、精霊が動いて肉体が動くのであるから、人体の運動はもとより、あらゆる肉体现象の本源は、魂そのものから出発するのである⁷⁾」と解説している。

以下に、「霊（精霊）」、「心」、「魂」についての岡田の定義を要約する。

(1) 「霊」

岡田によると「霊」とは一種のエーテル体である。プラトンおよびアリストテレス自然学の古典的要素であるエーテル（ギリシア語： $\alpha\iota\theta\eta\rho$, アイテール）は、ヴィクトリア朝の科学における仮説である光の媒質としてのエーテル、そして語源を同じくする化学物質としてのエーテルという名称に受け継がれていた。第一次世界大戦後、この用語はある程度一般にも広まり、ウォルター・ジョン・キルナーはこれをある種の訓練によって裸眼で可視化できると著作で主張し、「人間の雰囲気」のひとつの層の名称として採用している。エーテル（aether, ether, luminiferous aether）は、主に19世紀までの物理学で、光が伝播するために必要だと思われた媒質を表す術語であった。現代では特殊相対性理論などの理論がエーテルの概念を用いずに確立されており、エーテルは不必要な概念

であると考えられているが、エーテル体の実存性は完全には否定されていない。これについて以下のように指摘している。

では霊とは何かというと、之こそ無色透明一種のエーテル体であるから、科学で把握出来ないのも当然で、科学はまだ其処迄発達していないからである。然し神示によれば立派に実存している以上、将来科学が一層進歩した暁、把握出来るのは勿論である。此理によって治病の場合、病の本体である霊の方を治さなければ、体の方が治る訳はないので、浄霊とは霊には霊を以て対するという、此平凡な理屈にすぎないのである⁸⁾。

(2) 「心」

一般に使用されている「心」は多義で、人間の精神作用のもとになるもの、人間の精神の作用そのもの、知識・感情・意思の総体、おもわく、気持ち、思いやり、情け等を表している。岡田の論文には「心」を正確に定義した箇所は見られないが、本能、理性、個性の関係について、本能・感情と副霊（副守護霊^{†1)}を、理性と本守護神（本守護霊）を対応させ、さらにこれらが調和して個性が表れると述べている。このことを、『岡田式浄化療法2級テキスト 総論編』（以下、「2級テキスト総論編」と略す）では、「霊体の中に狭義の精神（心）が収まり、さらにその中に、良心的本質で神性そのものである純粋自己（魂・ハイヤーセルフ）と、悪に属する獣性としての本能的欲求（イド）」があり、両者の拮抗活動が精神活動を生み出している、と説明している⁹⁾。

岡田は人間の心における本守護霊（神性、善）と副守護霊（獣性、悪）の活動の他に、正守護霊の働きにも言及している。正守護霊とは「祖霊の中から選ばれた霊で、危急の場合助けたり、重要な事は夢で知らせたり、また特殊の使命をもつ者は神様（大抵は産土神）がお助けになる事もある」と解説している¹⁰⁾。本守護霊、副守護霊、正守護霊の三者の働きが心の営

^{†1}岡田は「守護神」と「守護霊」の二通りの用語を使用しているが、それらが使用されている文脈から察すると同義語として使用されている。

み、すなわち精神活動を左右している。また、上記の引用にもあるように、心の中心に位置する魂の四つの特性にも左右されている。

(3) 魂

岡田は神道の「一霊四魂」の思想^{†2}を踏襲している。四魂とは、

- 荒魂（あらみたま）……勇
- 和魂（にぎみたま）……親
- 奇魂（くしみたま）……智
- 幸魂（さちみたま）……愛

であり、この「四魂の調和した働きを伊都能売（いづのめ）の働きと言ひ、観音行である」と述べている^{11,12)}。このように、「魂」には本来四つの特性が備わっており、すべての特性が調和して働いたときに、人間の内面が理想的な状態に達することを説いているが、筆者は「魂」の質がこの四つの特性によって左右されると解釈する。さらに「魂」には「現魂」と「幽魂」の二種類があり、人間の「現魂」は「霊線」で「幽魂」と結びついており、この「幽魂」が神からの「命令」を取り次ぐ役割を果たしている。また、岡田は、「幽魂」は人間の行為の結果により180段階のいずれかに位置すると述べている¹³⁾。

^{†2}神道にける四魂とは、神の霊魂が持つ四つの側面のことである。荒魂は神の荒々しい側面、荒ぶる魂である。天変地異を引き起こし、病を流行らせ、人の心を荒廃させて争いへ駆り立てる神の働きである。神の祟りは荒魂の表れである。それに対し和魂は、雨や日光の恵みなど、神の優しく平和的な側面である。神の加護は和魂の表れである。荒魂と和魂は、同一の神であっても別の神に見えるほどの強い個性の表れであり、実際別の神名が与えられたり、別に祀られていたりすることもある。人々は神の怒りを鎮め、荒魂を和魂に変えるために、神に供物を捧げ、儀式や祭を行ってきた。この神の御魂の極端な二面性が、神道の信仰の源となっている。また、荒魂はその荒々しさから新しい事象や物体を生み出すエネルギーを内包している魂とされ、同音異義語である新魂（あらたま、あらみたま）とも通じるとされている。和魂はさらに幸魂（さきたま、さきみたま）と奇魂（くしたま、くしみたま）に分けられる。幸魂は運によって人に幸を与える働き、収穫をもたらす働きである。奇魂は奇跡によって直接人に幸を与える働きである。幸魂は「豊」、奇魂は「櫛」と表され、神名や神社名に用いられる。

(4) 体と霊（精霊－心－魂）と宇宙観

2級テキスト総論編では、岡田の医学の基本体系を、大別して宇宙観と健康法に分類し、前者はさらに（1）宇宙の構成と万有の法則、（2）人間観、（3）健康観・生理観から構成される。宇宙は「霊界」と「空気界」と「物質界」から成り、その構成要素は「火素」、「水素」、「土素」の三元素である¹⁴⁾。この三元素は小宇宙である人間の構成要素でもあり、霊は「火素」から、エーテル体は「水素」から、そして肉体は「土素」から成り、それぞれの元素の吸収器官は心臓、肺、胃である。

骨、筋、肉、皮等の物質体は——「現象界」に呼吸しそれと同一の形態である——水素質のエーテル体が、「空気界」に呼吸し、又、それと同じ精霊体が、——「精霊界」に呼吸しているのであります。故に、右の理によって「病気の根本」は其精霊体にあるのであるから、「精霊体そのものの病」を治さなければ、肉体の病気は絶対に治らないのであります¹⁵⁾。

この「水素質のエーテル体」とは「霊衣」のことを意味しているのであろうと思われ、さらに「これは霊から放射される光で朦朧（もうろう）体ではあるが、肉眼で見る人もある¹⁶⁾」と説いている。

宇宙の構成、人間の構成、構成三元素の関係を表1にまとめてみる。

岡田は、これら三元素の吸収器官である心臓、肺、胃の「三機能の関係を基礎として、病理を立てたもの」が「真の医学」である¹⁷⁾と述べ、心臓は火素を、肺は水素を、胃は土素を吸収する器官であり、「此三位一体的活動を促進する事こそ、健康の根本的要諦である。此意味に於て右の三機能の内の一つの良否でも全体に影響する以上、医学のように肺が悪ければ肺を、心臓が悪ければ、そのみを治そうとするのは、如何に間違っているかが分るであろう¹⁸⁾」と解説している。また、腎臓は、「水の方の浄化作用の役目で、心臓は火の方の浄化作用の役目であります。ですから、心臓と腎臓は、重要な夫婦役になります¹⁹⁾」と述べ、その機能の重要性を説いている。

小宇宙としての人間が宇宙とどのような関係にある

表 1 火素・水素・土素について（2 級テキスト総論編¹⁴⁾95ページに加筆）

	火素	水素	土素
発生源	太陽	月	地球
本質	太陽の精／火精／火の霊	月の精／水精／水の霊	地球の精／土精／土の霊
	霊気の元素	空気の元素	物質の元素
主元素となる世界	霊界	空気界	物質界
	霊界	現界	
人間	霊（精霊-心-魂）	霊衣	肉体
吸収内臓器官	心臓	肺	胃

かは、主として太陽と月と地球との関係に限定され、断片的に講話の中で取り上げられており、例えば、「眼は日月になっていて、左が太陽で右が月ですね。左が霊で右が体です。（中略）額は天の高天原だし、臍は地の高天原ですよ。人間の体をよく考えてみるとよくあてはまりますよ。その他の所は自分で考えれば判るでしょう²⁰⁾」と解説し、弟子達に体系化の課題を与えている。

3-1-3 健康の定義

岡田は健康を「真健康」と「擬健康」とに大別し、前者は病気の原因である「毒素」がなく、全く健康で将来も病気が発症することが無い状態であり、後者は一見健康に見えるが、保有毒素が発症していない状態であると定義している。また、病気とはこの毒素を体外に排出する「浄化作用」であるとし、健康であるから病気が発症すると考え、健康の種類を四種類に類別している：（1）真の健康者：「浄化力が旺盛であるから、毒素が一定量に達しない時、速くも排除工作が始まるので、それは軽微の風邪、又は下痢等で済んでしまう」、（2）健康体と弱体との中間者：「浄化力が幾分薄弱であるから、毒素が相当量に達するまでは、普通健康を保っているのであるから、いよいよ病気発生の場合は、軽症でないのも止むを得ない」、（3）病弱者：「かなり弱体者であるので、毒素が多量に堆積しても、浄化力不足の為、病気発生までには至らない」、（4）健康であるが急死する人^{†3)}：「平常頗る健康であるに不拘（かかわらず）、急死する症状で、その致命症はほとんど脳溢血である。これはいかなる訳かと

いうに、毒血多量の為浄化力は薄弱であるが、各器能が健康なのである。故に毒素に対する抵抗力が強い為、健康そうに見えるのであるが、いか程抵抗力が強くとも、ある一定量に達した毒血は、排除されなければならない。しかるに、その毒血排除口として、脳以外の器能は強健であるから、止むなく毒血は脳へ向って排除されようとする。それが脳溢血となる²¹⁾」

岡田哲学の根幹を成す「霊主体従・霊体一致」の法則によれば、霊界または霊がすべての事象の根源であり、主体であり、あらゆることは目に見えない霊界に先に起こり、目に見える現界に現われるという。また、この霊界と現界、霊と体は不離一体の関係で存在し、霊界の変化は現界に変化をもたらし、霊の変化は体に変化をもたらすとともに、その逆に現界や体の変化が霊界や霊にも影響を及ぼす。岡田医学の健康観も霊体一致の考えに基づいており、霊が健康になれば、心も肉体も健康になり、肉体が健康になれば精神も健全になり、霊の汚濁も解消されると指摘し、真の健康とは、無毒であり、霊体（心身）ともに健康である状態を指す。

3-1-4 病気の原因

（1）霊の曇り

岡田は、病気とは「集結せる毒素の浄化すなわち毒結の解体作用である」と定義し、病原は霊体局所の「曇り」であり、また「病気そのものの発生は、肉体を動かす精霊の千分の一の容積たる、魂のその一部に

^{†3)}『岡田式浄化療法 2 級テキスト 総論編』44ページによると、この第四種は生活習慣病予備群に該当。

発生するのである²²⁾」とも説明している。そして、毒結の解体とは「曇り」の消滅であると説いている。岡田によると、この「曇り」とは、薬剤等の異物が「毒化し」その毒粒子が身体中の水素に混入することにより純粋水素が変化して不純水素となったものであり、2級テキスト総論編では、薬剤を摂取すると血液が濁り、その濁血が転化（霊化）して不純水素（霊の曇り）になると解説している²³⁾。つまり、血液の清濁と霊体の清濁は関連しており、血液が濁れば霊が曇り、霊に曇りが生じれば血液も濁るので、血液の清濁が人間の健康を左右している。

（2）自然浄化作用

この「霊の曇り」は、「自然浄化作用」により解消されるが「霊主体従の法則」によって体に写って溶解される。この浄化作用プロセスに伴う苦痛がいわゆる病気のことである²⁴⁾。浄化作用とは、身体の何らかの異常（毒素）が正常に回復される（毒素の溶解）作用であり、この浄化作用を促進するのが自然治癒力（自然良能力または浄化力）である。この浄化作用には2種類があり、それぞれ「第1浄化作用」、「第2浄化作用」と呼ばれている。第1浄化作用は血液中にある種々の毒素が身体各局所に集溜固結するプロセスであり、この固結がある程度を越えた時に働く固結溶解作用が第2浄化作用である。その際発熱が生じ、固結が液体化され、液体化した毒素は発汗、喀痰、鼻汁等によって体外へ排出される。

（3）毒素の種類

「曇り」の原因である毒素にはいろいろな種類があるが、「あらゆる病原は然毒、尿毒、薬毒の三毒による」と述べている²⁵⁾。2級テキスト総論編では、この三毒を次のように説明している²⁶⁾。

然毒：薬毒が数代の人体を経て変化し、天然痘毒素となったもの。

尿毒：腎臓の機能低下によって生じる余剰尿。

薬毒：薬剤、食品添加物、農薬。

また、人間の思考・言語活動・行動と毒素に関して次のように記述されている。

悪の心言行から生じる毒素：悪に属する想念・言葉・行為によって自分自身の霊に曇りが生じる。また、霊線を通じて他人から悪の想念・言葉を受けることでも

曇りが生じる。それらが体に移写され物質化して毒血や膿となったもの。

（4）毒素集溜局所

浄化作用の結果、暫時身体局部に毒素が集溜凝結する。その箇所は大体一定している。

- 頭部の全体または一部
- 頸部淋巴腺
- 延髄部付近
- 肩部
- 腕のつけね
- 肋骨及びその付近
- 横隔膜及び胃部
- 横隔膜及び肝臓部
- 腹膜部付近
- ソケイ部淋巴腺
- 肩甲骨付近より脊柱の両側及び腎臓部

3-1-5 病気と輪廻転生、カルマとの関係

死とは、肉体が病気や老衰等で使用不可能となり人生の使命が遂行できなくなり、霊が肉体から離れ霊界に復帰することを言う。岡田によると、霊界での生活の大多数は生前犯した罪やけがれの浄化作用を受けることになる。この罪けがれには先天的と後天的の二種類がある。

■ 先天的：多数祖先又は自分が前世において犯した罪けがれは死後霊界で浄化されるが、すべてが浄化されず霊的残渣が、現界で生活を営む人間の脳脊髄に常に流れてきている。これが人間の霊を曇らせる。

■ 後天的：現界での自分の犯した罪けがれの堆積。

このように神道の罪けがれ観と仏教的輪廻転生観に基づき、祖先と自分の前生の罪けがれが死後の霊界における浄化（浄霊）作用で処理しきれず、その余剰「霊的汚素」が人間の精霊内に流入し物質化し膿汁化し、これが病気の原因の一つとなる。

3-1-6 病気と想念

岡田は、病気の原因として毒素と輪廻転生・カルマにより生じる「曇り」の他に、人間の想念と言葉が健康に及ぼす影響についても言及しており、「これら毒

微粒子は悪の想念と悪の行為によって発生し、増量し、それが人間の苦悩の原因となるのであって、反対に善の想念、善の行為によって減減するものである。曇りがある程度増量するに従い、自然浄化作用が発生する。それが小にしては人間の災厄や病気となり、大にしては飢病戦の小三災、風水火の大三災ともなるのである²⁷⁾と述べている。

「曇り」の原因となる想念や言葉には、以下のものが挙げられている。

■ 想念に関するもの

不平、憎み、呪い、妬み、個人的怒り、偽り、復讐心、執着

■ 言葉に関するもの

自然に対する不平、人に対する非難攻撃、怒号、罵声、秘密、欺瞞、咎め、愚痴

またこれらの自動的な否定的想念・言葉と同様に、他動的な想念・言葉、すなわち他者から伝達される否定的想念・言葉も「曇り」となり、霊体に曇りを増し、浄化作用が発生しやすくなる。

3-2 岡田式健康法と統合医療

岡田の西洋医学の誤謬の指摘を以下の5項目に要約することができる。

- ① 人間観の誤謬：霊と体から成る人間
- ② 病気・健康観の誤謬：病気の原因は「霊の曇り」、病気は浄化作用、病気は健康になるために存在する
- ③ 投薬医療の誤謬^{†4}：薬は浄化作用を妨害する
- ④ 自然治癒力の無視：人間には毒素を体外に排出する自然治癒力（浄化力）が備わっている。
- ⑤ 治癒潜在能力の未発見：人間には非常に「稀薄純粹」な「人体放射能」が治癒力として潜在し、特殊な訓練によってこの潜在能力を強化することができる。

以上の誤謬の指摘に基づいて、岡田は「明日の医学」、「日本医学」、「霊的医学」等の名称を提唱し「新しい医学」の創成に尽力し、その礎を築き上げた。現時点では、MOAインターナショナルでは「新しい医学」の概念を以下の5つの特徴を備えた医学として定義している²⁹⁾。

① 霊的医学

② 個人を大事にする医学

③ 治療・予防・健康増進を一つの理論で実践できる医学

④ 岡田式浄化療法を中心とした健康法

⑤ 幸福の原理に基づく「生き方」による健康法

これらの特徴を備えた「新しい医学」を浄化療法、食事法、美術文化法から構成される「岡田式健康法」と総称し、統合医療の枠組み内に位置づけをし、さらに統合医療を次のように定義している³⁰⁾。

- ① 西洋医学と相補・代替医療を統合した多様性ある医療：「これらのさまざまな医療を統合するのが「統合医療」ですが、単に西洋医学の中に相補・代替医療を取り入れる、あるいは、西洋医学と相補・代替医療をひとつの医療体系に統一すれば良いとは思えません。なぜなら、西洋医学的な手法で、すべての相補・代替医療の効果を証明することは難しいからです。統合医療は、西洋医学一辺倒の考え方から脱却して、どこまでも患者を中心に、西洋医学、相補・代替医療を問わず、あらゆる療法からそれぞれの患者に合った医療を選択できる、多様性のある医療と言えます。」

- ② 一人ひとりを多面的に見つめる医療：「その人の病気症状を取り除くことを目的にするだけではなく、

^{†4}岡田は自然治癒力を高め、浄化作用を促進させる自然薬に関しては言及していないが、以下の講話記録はさらに研究される必要があるだろう。

“柿や茄子は浄化作用を促進させると承って居りますが、之らを薬物の如く常に食用に供するという考え方は間違いでしょうか。“間違ってますね。つまり、うまければ食ったらいいんです。薬と思ってはいけません。茄子なんかは秋にはよくとれますが、沢山取れるのは沢山食べろって事なんです。痰には茄子は毒だなんて食べない人もありますが、之は間違いですよ。かと言って勿論茄子ばかり食べても居られないから、（笑声）そこは適当にやったらいいんです。柿も同じで大抵の人は柿は好きだから、大いに食べたらいんです。薬だと思って食べちゃいけないんです。薬なんてのは世の中にはないんですから。若しあるとすれば米が薬ですよ、米の飯はいくら食べても中毒しないから。

“柿は婦人病に悪いとか申しますが— “そんな事は絶対にありませんよ。柿を食べると小便が出るからそう言うんでしょうが、小便が出るのは腎臓が働くからで、だから却っていい訳ですよ²⁸⁾。

心の状態や家庭での生活習慣、社会的環境などから多面的に原因を探り、一人ひとりに最もふさわしい治療法・改善方法を一緒に考え、それを提供します。」

- ③ 病気予防を大事にする医療：「QOL（生活の質）の向上を図り、生活習慣や環境改善を含めた総合的な健康づくりに取り組みます。」
- ④ 人間の本質を見つめた医療：「人間の本質、健康の本質を見つめる医療」

以上の「岡田式健康法」が「新しい医学」として理論的發展を遂げるには、多くの研究課題が残されているが、MOA健康科学センターでは近年さまざまな研究活動が実施されている。

4. 人智学医学

ルドルフ・シュタイナー（オーストリア生まれ、1861～1925）は、日本ではシュタイナー教育の提唱者として知られているが、それは彼の一面でしかなく、ヨーロッパではむしろ神秘学者、哲学者、科学者として多大な影響を残している。シュタイナーが創り上げた精神科学を人智学（Anthroposophie）と言い、それに立脚した医学が人智学医学である。シュタイナー自身は医師ではなく、オランダ人医師イタ・ベークマンらの協力を得て、1925年、人智学医学を『治療の基本概念—精神科学の叡智による医術の拡大』という本の中で体系化させる。人智学医学は今日の近代西洋医学の基盤となっている自然科学的視点を基本とする点、他の医学体系と同じである。ただ、宇宙観、身体観を唯物的な視点から目に見えない領域へと拡張していくところが大きく異なっている。ゆえに、人智学医学はあくまでも従来の医学を拡大したものであり、それに取って代わるという意味での代替医学ではない。また、基本理論になっている人智学は医学だけでなく、教育にも農業にも、あらゆる分野に応用されてきており、各分野が互いに深く関係し合っている。とりわけ医学と教育は関係が深く、教育は予防医学の一環であると考えられている。

人智学および人智学医学は、自然のプロセスにのっとった考え方を基盤としている。目に見える現象や物質は、自然のさまざまなプロセスが静止したものでし

がなく、目に見える世界は、絶えず目に見えないプロセスに支えられている（参考：霊主体従）。人智学医学では、その見えないプロセスにも注意深く目を向け、自然本来のプロセスに重きを置く医学であり、自然に決して対抗することなく、自然との協調を重視している。

人智学では、人間は「肉体」「エーテル体」「アストラル体」「自我」から構成され、これらの四つの身体レベルが、土＝肉体、水＝エーテル体、空気＝アストラル体、火＝個我と4つの構成要素に対応され検討される。これらの4つの構成要素は西洋の「四大元素」（土・水・風・火）に対応しており、東洋の五行（木・火・土・金・水）、さらには岡田の三元素（火素、水素、土素）にも共通するところがある。そして、人智学医学では、実際にこれら四つの身体レベルと4つの要素に応じて分析し、厳密な診断と治療が進められる。

人智学医学は、1970年代よりドイツ語圏で非常に普及し、ドイツ、オーストリア、スイスの3国で人智学医学を取り入れている医師は約500名、人智学医学を主とする病院もヨーロッパに20棟、人智学医学を副専攻で教えている医学部はベルリン自由大学とヴィッテン・ヘルデッケ大学である。筆者の所属するヴィッテン・ヘルデッケ大学はドイツ初の私立大学として、人智学医学を中心とする医学部が1983年に創立され、統合医療の研究分野で業績を残している。

4-1 人智学医学における人間観

人智学医学では、人間は医学的・生理学的観点から三機能（神経感覚系、リズム系、新陳代謝・四肢系）に分類され、精神科学的観点からは四本質（肉体、エーテル体、アストラル体、自我組織）に分類される。

4-1-1 人間の三機能分類

人間の三機能の分類は、人体の解剖学的構造と生理学的課題によっている^{31, 32)}。神経感覚系は解剖学的に見れば人間の頭部にあたり（植物では根にあたり）、この部分では静寂と冷たさが存在する。生理学的には思考と理解魂に、そして破壊的で阻止的な物質代謝機能として現われる。ここでは有機物質が鉱石化され固

形化する。

リズム系は解剖学的に見れば人間の胸部にある（植物では主として葉にあたる）。生理学的に見れば、感情と感情魂の基本となっている。呼吸と血液循環によって意識と物質代謝が働き、分配的リズムのプロセスが生じる。

新陳代謝・四肢系は解剖学的に見れば横隔膜下部にある内臓を指す（植物では花と実にあたる）。生理学的には運動、物質摂取・消化、変換、排泄、栄養素の製造、高度の細胞分裂と細胞結合として現われている。これらの諸活動の基盤として、熱と水分が必要である。生成、変換、分解プロセスは自由意志と人間の意識魂の土台をなしている。

これらの三機能は、生理学的には自我の性質を決定する魂の要素の中に現われている。三機能間にはさまざまな形式と強度で相互作用が見られ、常に働いている^{33, 34)}。

4-1-2 人間の四本質

人智学では、人間の本質を四つに分類する。肉体（空間体、形体組織、物理的肉体意識）、エーテル体（時間体、生命体、水分組織、エーテル的睡眠意識、無意識）、アストラル体（魂体、空気組織、アストラル的夢意識）、自我（自我組織、熱組織、自我意識、

日中意識、覚醒意識、上層意識、今日の意識）。図7に示すように、肉体とエーテル体とアストラル体は人間の体を構成しており、自我は魂のことである。また、体と魂以外に霊が存在する。これらの複合体が人間本質の基本となっている。

（1）肉体

肉体は生物学的実質と鉱物的実質から成り、この両者が体の本質的な基本構造である。生理学的に見れば、肉体性と体重と物質の伸長を促進する動的な生命プロセスに関わっているのが肉体である。人間においても高等動物においても、この肉体はエーテル体と常に結合しており、肉体が外傷を負えば、エーテル体も傷ついていることになる。下等動物や植物においては、エーテル体と肉体との結合は強くなく、肉体の外傷は高等動物より早く癒される³⁵⁾。

（2）エーテル体

エーテル体はリズム的時間体あるいは生命体を形成しており、「水素」でもある動的な液体組織として機能している。三機能分類のリズム系は、エーテル体に属する機能であり、生理学的に見れば、生物学的形体変成プロセス、運搬プロセス、栄養摂取成長プロセス、生殖プロセスを司る。上記のように、エーテル体は、アストラル体の感情と自我組織の理性のような人間の高次のプロセスに不可欠である。人間はまずエーテル

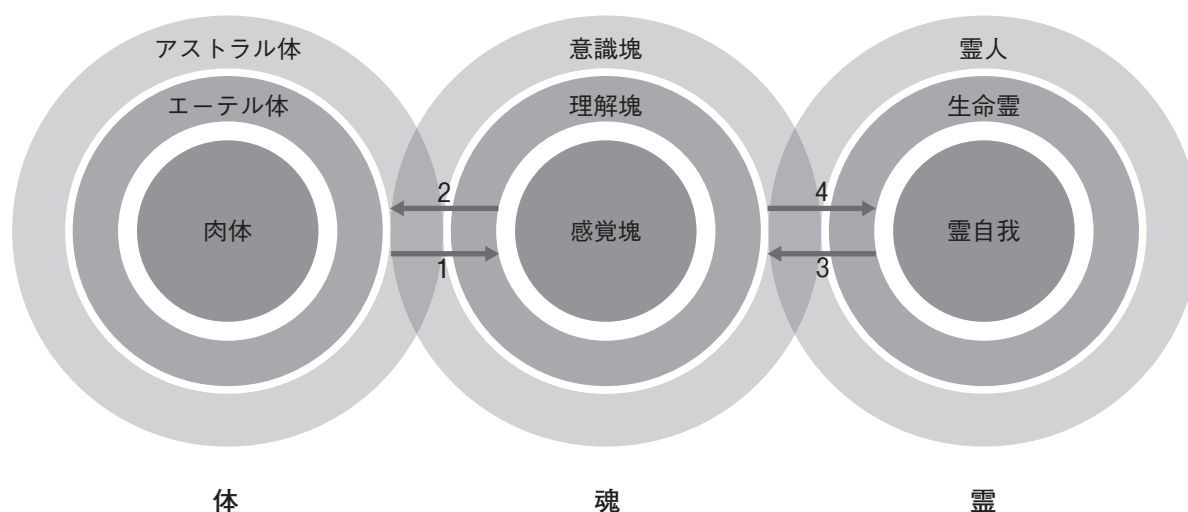


図7 人智学医学における人間の本質

1 = 感覚認知、2 = 比較・解釈、3 = 直感、4 = 学習・直感的自己開発

体を通して感覚を認知することができ、認知されたものが、アストラル体、そしてさらに自我組織と認知魂へと伝わっていく。睡眠中にはエーテル的睡眠意識とアストラル的夢意識が機能している。前者は植物にも存在する³⁵⁾。

(3) アストラル体

アストラル体は魂と密接な関係にあり、魂からの影響を多大に受けており、魂化体、感覚体とも呼ばれるものである。生理学的に見れば、一方では、摂取と排泄のための個体化・物質代謝プロセスを司る新陳代謝・四肢系（上述）に関わっており、他方では、神経感覚系（上述）における空気・光器官として、細胞呼吸、運動、感覚認知、神経機能に関わっている。アストラル体は喜怒哀楽等の現象として表れ、そこには欲望や情動や情緒や熱情等が隠れており、これらは輪廻転生の際に付随してくる（「4-1-5 病気とカルマ」を参照）。その際これらのアストラル的特性は、キリストとアーリマンからの影響に妨害されるが、他方ではこれらの感情と強く結びついてしまったアストラル体を伴う者は、霊界の外側に開かれていく³⁵⁾。

火傷の際の痛みは、アストラル的苦痛意識で感じられる。異物から目を守ろうとするまばたき運動や、踵への圧力による足の反射行動の際の反射を引き起こす人間への外部圧力は、アストラル的睡眠意識、無意識に影響を与えている³⁵⁾。

(4) 自我組織

自我組織とは人間の魂であり、認知、理解、思考、判断、評価等の精神的体験を引き起こす。自我組織には中心に感覚魂があり、その周りに理解魂がある。自我は理解魂に影響されるので、この理解魂が自分自身への入り口である。この認知的な理解魂を通して、人間は自己開発を行い、さらに霊自我にも影響が及び、自我は人生の中で霊を獲得する。ゆえに、霊は自我組織への入り口である。認知的な直感とは人間の霊の声である³⁴⁾。

さらにこの自我組織の外側にあるのが意識魂である。人間は個人的な意識を所有し、またこの意識を遮断することもできる。人間は十分に聡明であれば、病気を忘却プロセスに追いやり、新しい魂の力で自己教育を成し遂げることができる³⁵⁾。

高等動物は肉体とエーテル体とアストラル体のみから成り立っており、直感は働かない。人間は魂によって自由意志が可能になり、このことがアストラル体に反応している。アストラル体とエーテル体の自然な相互作用が一瞬休止し、エーテル体が自我の行為の影響を受け変化することがある。自我組織はエーテル体内部まで浸透し、魂と思考の認知的な比較と解釈はアストラル体と夢意識、さらにはエーテル体とエーテル的無意識にも影響を及ぼす。エーテル体は肉体と結びついているので、最終的には肉体もこの影響を受ける^{32, 35)}。

生理学的には自我組織は火素のなかに表れ、その物理的な特徴は血液中の熱である。血液はエネルギー獲得のための燃焼プロセス、衝動機能、変換機能、新陳代謝、体温調節、血液製造を制御する。自我とアストラル体は緊密な関係にあるので、自我組織は熱制御器官、魂器官として、また神経感覚系の中に存在する。

人間の体と同様に、自然界でもさまざまなプロセスに四つの原素を見いだすことができる。土素は空間体の静止状態と形の組成に関わり、水素は物質の自然な成長、形成、変成に関わり、空気素は気体分子の濃縮化、希薄化、運動に関与している。火素は自然現象連鎖の最高の原素として、流動し、変換し、他の原素を暖めることにより、あらゆる運動の源に関わっている。

図8では、自然現象と自然プロセスが人間の四つの本質と人体の生理学的現象とどのような関係にあるかを示している。

4-1-3 健康の定義

健康と治癒過程は、本来は肉体とエーテル体とに見いだすことができる。それに対して、治癒力またはその原理はエーテル体のみに見いだされる。エーテル体は常に肉体の成長を促進するが、肉体は逆にそれを阻止しようとする。エーテル体には治癒力があり、常に体を健康にしようとする働きがある。この治癒力によってアストラル体もある程度抑制され、感情がアストラル体に留まることにより、肉体が大きな被害を受けないですむようになっている。このようにエーテル体とアストラル体の相互作用によって健康と病気との均衡が保たれる³⁵⁾。

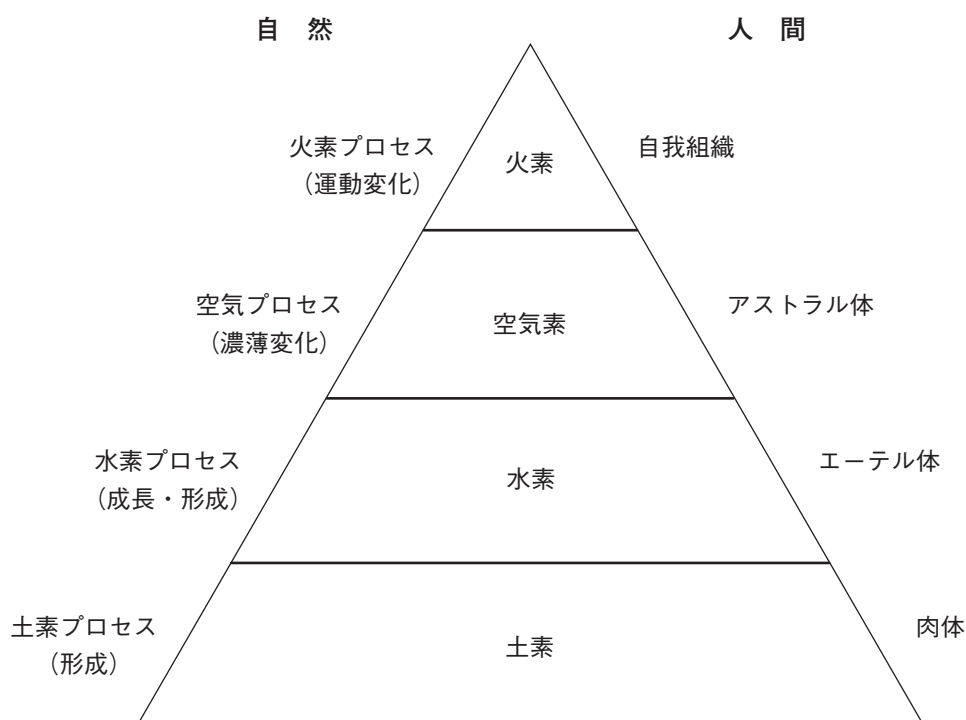


図8 自然プロセスと人体の生理現象との比較

我々は意識的な想念で、(善的、悪的) 行為や思考や心の状態が器官に影響するのを阻止することができる。意識的な想念力を持てば、行動をうまく制御し、肉体器官に悪影響が残らないような防御作用が働く³⁵⁾。

病気で得た力でもって、さらに人生を前向きに生きていくことができれば、病気は意味のあるものである。そのようにして病気は治癒し、病気の存在によって明らかになった目標を達成することができる。病気を乗り越えることができれば、以前には無かった完全な力を得ることができる。この新しい力を自分と他人のために使うことができるならば、病気は治癒し、病気を乗り越えることができる。つまり、魂が何かを乗り越えようとする時に、人間は病気にかかり、同時にこの病気と闘おうとする傾向がある。病気になるのは、治癒されるからである。人間はカルマの法則により病気を乗り越え、残りの人生で物質的计划を遂行する力を獲得する。しかし、病気を乗り越えようという意志があるものの、治癒過程で器官が弱められてしまった場合には、死に際に必要となる新しい力のために使われる限られた力しか獲得できない。この新しい力は次の

人生の設計の中に見いだされる³⁵⁾。

治癒されるか否かの決定は、自我組織ではなくもっと高度な霊的意識においてなされる。我々の普通の自我レベルでは、病気が治るか治らないかは判断できないし、間違って判断してしまえば、人間の自由領域を侵してしまうことになる³⁶⁾。

4-1-4 病気の原因

健康な人間は、上記の四本質と三生理的機能が調和的な均衡関係にある。アストラル体は、エーテル体と肉体の中に適切な範囲で浸透しており、他の三本質と均衡のとれた状態にある。この均衡が崩れ、バランスを取り戻そうとするための人体器官における自然なプロセスが病気であり、体と意識の発達を促進するものである。病気症状は我々の感情の投影であり、アストラル体によって決定的に押し進められる。病気の原因は肉体ではなく霊体に見いだされる。

(1) 急性疾患

生理的三機能が不調和な関係にあるときに、病気が引き起こされ、調和を取り戻そうとする。また、アス

トラル体がエーテル体と肉体の内部に深く浸透し、これらの本質のバランスが崩れた時にも病気が発生する。アストラル体の影響が強すぎると、エーテル体の力が弱まり、アストラル体の感情と肉体とが結びついてしまう。同様に自我組織の影響が強すぎると、エーテル体の力が弱まり、肉体の一部が霊化してしまう。アストラル体の影響が普段より強すぎるということは、アストラル体がエーテル体と肉体のところへ戻ってくる目覚めのときと同じようなことが起き、アストラル体がエーテル体と肉体の内部に侵入し、意識を持とうとしだす。そうすると人間は病気になる。つまり、病気とはアストラル体の異常な成長状態のことであり、異常なエーテル体と肉体への侵入の状態である。これに対して、健康とは睡眠時の正常な状態であり、アストラル体がエーテル体と肉体から離脱している状態を言う。健康状態を保つためには、日中我々の意識からアストラル体を眠らせなければならない。

アストラル体が規則正しく働かないと、アストラル体のいたるところに汚物としての痰が分泌され、最初に喉が弱くなり、身体中に痰が発生する。この痰は体内の水に溶けて、あらゆる器官に流れていき、肉体的な内疾患を引き起こす。この濁った水は体外へと蒸発し、酸素と結合してさらに肺から吸入され神経を阻害する。これが精神に関する病気の原因である。

病気の際には異常な痛苦意識が生じるが、これを一般に病痛と呼んでいる。普段の健康的な成長状態ではこの病痛がないのは、アストラル体が睡眠中で、エーテル体と肉体と規則的な関係にあるからである。病痛はアストラル体がエーテル体と肉体の中に押し込められて意識に昇ってくる状態の表現である。病気とアストラル体の目覚めには痛み以外の症状が現われることもある。大抵の人間は、病痛が無い時には、病気から逃れようという努力をしない³⁵⁾。

(2) 慢性疾患

自我組織が体的に表現されたものが血液であり、慢性病は霊的に見れば、自我組織に原因があり、物質的に見れば血液に原因がある。つまり、慢性病の一定の形態は、自我の心的な基本性格に関連している³⁵⁾。

(3) 一部は慢性で、一部は急性である病気

このような病気はエーテル体の体的表現である腺器

官と関連しており、民族、種族、人種の性格と関連している³⁵⁾。

(4) 伝染病

肉体に原因がある³⁵⁾。

(5) 神経病

神経衰弱、ノイローゼ、ヒステリ等の軽い神経病の原因は記憶に無い子供時代にある³⁵⁾。

4-1-5 病気とカルマ

シュタイナーは、病気とカルマとの関係について言及しており、彼によるとカルマとは人間のある行為に導き、さらに進化するためにそれを清算するための前世の力である。カルマは人間の個性に関係している。カルマは霊的原因律、因果法則であり、人生における経験、行為、思い等によってカルマは発達し、感情と情緒によって魂の中に表現される³⁵⁾。

人間のアストラル体にもエーテル体にも前世の行為の結果がしみ込んでいる。再生後の動物はアストラル体のみが器官に影響を及ぼし、治療力は限られている。人間のアストラル体は自己魂と強くつながっており、アストラル体がカルマ的病気を伝達する役目を担っている。その際にアストラル体はエーテル体の治療力を抑えるので、エーテル体は体の故障を治療するために強いエネルギーを必要とする³⁵⁾。

エーテル体は前世のものを後世にもたす力を有するが、この力はアストラル体に抑制されている。このことが人間の健康状態に影響を及ぼしている。以前の受肉化の際にエーテル体が肉体に強烈に入り込んでいるときは、エーテル体的睡眠魂のような自我意識が再生後の新しい人生に顕現する。そうして、エーテル体は肉体を占取するが、痛みの意識よりも弱い意識なのでこのことに人間は気付かない³⁵⁾。

4-1-6 病気と想念

シュタイナーによると、アストラル体は二つの側に偏る。舞い上がって足が地につかないような心理状態を、ユダヤ教－キリスト教の堕天使の名を取って「ルシファー的」と言い、物質に固執して精神的なものを否定する傾向を、ゾロアスター教の悪魔の名を借りて「アーリマン的」と言っている。夢想に耽って現実感

覚を喪失するのがルシファー的、凝り固まって攻撃的になるのがアーリマン的である。自我組織が十分に作用せず、アストラル体がこのどちらかの傾向に偏って乱れると、生命の流れが変調をきたし、肉体が病むというのである³⁵⁾。

4-2 人智医学における治療法

今日の人智学医学は人間の健全なバランスを保つためにさまざまな方法が応用されており、主として次の三つの分野で人智学医学が実施されている。

- ① 医学的体的方法（ホメオパシー）
- ② 芸術的方法（治療オイリュトミー、芸術療法）
- ③ 霊科学的方法（瞑想、リズムマッサージ）

人間の器官のなかにある本来の治療力を外部的方法で支持することによって、病気が治癒される³⁷⁾。しかし、病気の原因がルシファー^{†5}の力に関係しており熱や冷えを伴う症状は、電気療法では治療できない。この療法は逆にルシファーの力を強化してしまうからである。

人間の三機能と四本質すべてが治療の際に取り扱われなければならない。例えば、慢性疾患の場合には、患者の適切な成長を促進するように、心身の調節と均衡が保たなければならない³⁵⁾。

さらにシュタイナーは、患者の自己治癒力が生じるように患者を手助けするか、患者の治癒が起きるように自然を支持しなければならない、と主張する。治癒者は人間の器官における自己治癒の革命的原理を学ばなければならない。また、病人の健康意志は、医者の方の治癒意志と深く関わっており、両意志の関わりはセラピーの際に重要な役目を果たしており、教育にも応用できる見本である³⁸⁾。

患者が死ぬか延命するか判断の際にも、我々の使命は、患者の自己治癒力による治癒の手伝いをするということにあることを忘れてはならない。医師は人間の個人

の尊厳に踏み入ることはできない。患者の最期を手助けするのは尊厳を踏みにじることになり、我々の意志を患者の個性に押し付け、異なった効果を与えてしまうことになる³⁵⁾。

我々は患者の自己治癒力が発揮されるように最大限の努力をしなければならない。そして、正しくカルマを理解し、不治の病による厳しい運命の意味を知らなければならぬ。人間の内側から発生し、カルマによって伝えられるような特別な病気は、カルマの法則に則って理解されなければならない³⁵⁾。

4-3 人智学医学と統合医療

ベルリンに本部を置く人智学医学協会によると、人智学医学は、「西洋医学に基礎を置き、さらにこれを拡張した統合医療」である。すなわち、人智学医学の中に、西洋医学が含まれ、代替相補医療ではないことを主張している。西洋医学の拡張の意味するところは、

（１）人間観の拡張と（２）治療的診断的な拡張（例えば生活記録的な病歴記述）であり、患者の病気発生に生命力や霊的なものがどのように関与しているか、合理的な全人的観点から見て、治療が肉体だけではなく霊と魂にどのような影響を与えているかが研究されている。統合医療としての人智学医学とは、霊的に拡大された自然科学的医学のことであり、肉体では物質的プロセスのみが働き、霊と魂では非物質的な霊的プロセスが働いているという洞察に基づいている。

杉岡³⁹⁾は、「統合医療が人間をどのようにとらえるかという人間論の問題」をビクトル・フランクルの次元的人間論（精神的次元、心理的次元、身体的次元）に基づいて考察し、統合医療におけるさまざまな医療は、「治療原理や治療方法の違いではなく、人間存在のどの次元に関与するかによって分類され位置づけられ」、多様な医療の「緩やかな統合」が可能になると述べている。このことは、まさに人智学医学が追及していることである。つまり、人智学医学それ自体が、人間存在の精神的次元、心理的次元、身体的次元のすべてと関与し、西洋医療のみならずさまざまな療法を利用して、患者に最も適切な治療法を選択する統合医療であり、その理論を形成する「第三の医学」の体系を確立しようとしたのが、シュタイナーの人智学医学

^{†5}キリスト教の伝統的解釈によれば、ルシファーは元々全天使の長であったが、土から作られたアダムとイブに仕えよという命令に不満を感じて反発したのがきっかけで神と対立し、天を追放されて神の敵対者となったとされる。被造物の中で最高の能力と地位と寵愛を神から受けていたために自分が神に成り代われると傲慢になり、神に反逆し、墮天したという説がよく挙げられる。

であると言えよう。

にする。

5. 対照分析

以上第3章と第4章において岡田式健康法と人智学医学の概要をそれぞれ岡田とシュタイナーの原文に基づいて解説してきたが、第5章では両医学理論の類似点と相違点を、以下の対照分析表に基づいて、明らか

5-1 類似点

(1) 人間観

岡田もシュタイナーも人間は体と霊から成り立ち、人間存在を四つの本質的実体から解説している。まず、物理的な存在である肉体（体）が霊から区別される。肉体は現在の科学で解明されつつある物理的現象的存

表2 重要概念を含む対照分析表

対象項目	岡田式健康法	人智学医学
提唱者 (創設協力者)	岡田茂吉	ルドルフ・シュタイナー イタ・ベグマン
治療法	岡田式浄化療法 食事療法（自然食・自然農法） 芸術療法（活け花、茶道）	物理療法（リズムマッサージ） 自然薬療法 芸術療法（オイリュトミー、絵画彫塑療法、音楽療法、言語療法）
治療者	主として療法士	主として医師
資格	浄化療法研修3級、2級（2013年現在）	医師国家試験、人智学医学研修
宇宙観・自然観	この宇宙の森羅万象は火素・水素・土素から成る。	火素・水素・空気素・土素
人間観	肉体 精霊 心 魂	肉体 エーテル体 アストラル体 自我組織
健康観	「真健康」と「擬健康」とに大別し、前者は病気の原因である「毒素」がなく、全く健康で将来も病気が発症することが無い状態であり、後者は一見健康に見えるが、保有毒素が存在するが、病気が発症していない状態。	四つの本質と三つの生理的機能が調和して、均整がとれている状態が健康。
病気の原因	霊の曇りの浄化作用。	エーテル体とアストラル体の不調和を均衡化させようとするプロセス。
西洋医学との関係	一方では、西洋医学の有用性や西洋医学の連携の必要性を説き、医師とともに診療を行う療院構想を提唱する。他方では、西洋医学の誤謬を指摘し、霊的医学としての「新しい医学」の創成を提案。	現代医学に取って代わるものではなく、現代医学の自然科学に基づいた有用性を尊重しつつ、新たな診断と治療の可能性を与える。そのため人智学医学の医師は、現代医学の知識および技能を持っていることが前提。限界に至っている現代の医学を継続発展させる。
薬剤の使用	薬剤は薬毒を生じさせるものであるとし、投薬治療を批判。	自然治癒力を高める自然薬（薬草、鉱物）の投薬。
統合医療との関連	岡田式浄化療法を中心とする岡田式健康法を、日常的に実践できる健康法として、生活の中に定着・拡大させる。	人智学医学そのものが統合医療。

表 3 人間観

岡田茂吉	ルドルフ・シュタイナー
精霊：無色透明一種のエーテル体。	エーテル体（生命体）：「水素」でもある動的な液体組織。人間はまずエーテル体を通して感覚を認知することができ、認知されたものが、アストラル体、そしてさらに自我組織と認知魂へと伝わって行く。
心：本守護霊、副守護霊、正守護霊の三者の働きが心の営み、すなわち精神活動。	アストラル体（感受体）：感情・表象・思考の担い手で、自我組織（魂）からの影響を強く受ける。
魂：「勇、親、知、愛」の四つの特性が備わっており、また「現魂」と「幽魂」の二種類があり、「現魂」は「霊線」で「幽魂」と結びついている。	自我組織：我々の魂であり、中心から感覚魂、理解魂と意識魂で構成されている。理解魂を通して、我々は自己開発を行い、さらに霊と霊的自我にも影響が及び、自我は人生の中で霊を獲得する。ゆえに、霊は自我組織への入り口である。認知的な直感とは我々の霊の声である。

在であり、西洋医学の対象でもある。この点を、岡田もシュタイナーも批判しており、真の健康、病気の真因は肉体のみを対象とする医学では解明できないと説く。非物理的存在である霊的存在としての人間は三つの本質に分類される。岡田は、「精霊-心-魂」、シュタイナーは「エーテル体-アストラル体-自我組織」という概念を使用している。両者の概念をそれぞれの言説を用いて対照分析してみると、非常に似通った概念であることが明確になる。

さらに、注目すべきは、岡田の説く「現魂」と「幽魂」はシュタイナーの「理解魂」と「霊自我」に相応し、それぞれの後者は人間存在外にあることが示唆されている。また、それぞれの前者と後者が密接に結びついており、人間は「現魂」あるいは「理解魂」を通して自己開発（浄化作用）を行い、それが「幽魂」あるいは「霊自我」に影響を与え、また、「幽魂」あるいは「霊自我」を通して高次（神）の声（直感）を得ることができるとしている。

その魂こそ神から与えられたるもので、これが良心そのものである。この魂の故郷すなわち本籍地ともいべき根源が、右の百八十段階のいずれかに属しており、これを名付けて私は幽魂という。この幽魂と人間の現魂とは霊線によって繋がれており、絶えず人間の思想行動は幽魂に伝達され、それが神に通じており、また神よりの命令は幽魂を経、霊線を通じて人間に伝達さるるのである⁴⁰⁾。

（2）病気の原因

岡田によると、病気の原因は「精霊の曇り」であり、「曇り」とは「不純水素」のことである。つまり、精霊（エーテル体）の一部が、不純になる現象である。シュタイナーは「炭酸プロセスが支配されずに病気になる」現象について言及しており、さらに、「アストラル体は、炭酸プロセスを支配するのに十分だけ強くなければならない。アストラル体が弱いと、炭酸およびその崩壊による生成物が外に落下し、病気がはじまる⁴¹⁾」と述べ、アストラル体（心）に病気の原因があることを示唆している。

（3）病気とカルマとの関連

カルマとは因果応報を一般的に意味するが、岡田もシュタイナーも病気との関連について言及している。岡田は現生と前世の両方における行為が霊の曇りに関係していると述べるが、シュタイナーは輪廻転生観に基づき過去生の行為が及ぼす影響のみについて言及している。また、両者に共通していることは、自分が霊的に向上するチャンスとして病気にかかっている、というように病気に積極的な意味を見いだしていることである。闘病はカルマ解消のプロセスであり、自分を内省し、病気を乗り越えることにより高次の健康状態へと進むことができると考えられている。

岡田は因果応報（善因善果・悪因悪果）と「霊衣」、「放射能力」との関連についても言及しており、自分の善意（自動的）とそれに対する他人の感謝（他動的）の「想念が光となり、霊体（霊衣・精霊）に光が

増」し、逆に自分の悪意（自動的）と他人からの怨み、妬み、憎み（他動的）等の「想念が曇りとなって伝達され、霊体に曇りを増す」と解説している。また、「施術者の霊衣の厚い者ほど治療成績が良い」と指摘し、「本医術の根本は、術者の霊衣を厚くする事である。それは短期間の講習によって或程度霊衣が厚くなり、施術の体験を多く積むに従って増々厚くなるのである⁴²⁾」、と述べ、因果応報と施術能力（放射能力）との関連についても考察している。同様のことをシュタイナーは次のように説明している。「アストラル体はエーテル体に影響を与えます。アストラル体のなかに入れられたものに、エーテル体は依存するのです。ですから、人間が善と悪、正と不正、真実と虚偽の境域のなかでどのように人生を送るかによって人間のエーテル体は変化する」。つまり、岡田もシュタイナーも心（アストラル体）が精霊（エーテル体）に影響を与え、病気の原因となったり、幸不幸の原因となるという因縁生起説^{†6)}をとっている。

（４）自然治癒力とエーテル体

シュタイナーによると、物質体としての肉体は絶えず病気に罹かかろうとする傾向にあり、肉体の中のエーテル体はその病気を治癒させようとする傾向がある。すなわち、自然治癒力とはエーテル体の働きであり、岡田の言う「精霊」の働きであろう。

5-2 相違点

（１）薬剤による治療

岡田は一切の薬剤（漢方薬も含む）の投与を否定し、病気の原因である精霊の曇りは薬毒によることを指摘している。また、健康保持のためには食物を摂るだけで十分であり、「人間は定められた食物以外の異物は、体内に入れてはならない」と述べている⁴³⁾。食物に関しては、従来の栄養学を批判し、「食物に含まれる霊が人間の霊を養う」ことを基本理念とした栄養学を構築している。

養学を構築している。

シュタイナーは、鉱物、植物、動物から作られた薬を区別し、それぞれ自我組織、アストラル体、エーテル体に作用し、それぞれの働きを強化したり抑制したりすることを突き止め、物質的な薬の中に内在する霊的なものを治療に利用することを人智学医学の治療法の中心に据えている。人智学医学では、ホメオパシーの手法である希釈法を用いており、そのためにホメオパシー療法と混同されることが多いが、類似原理^{†7)}に基づいて薬剤を処方しないというのがホメオパシー療法と異なる。人智学的世界観に基づいて患者を診察し、薬剤を処方しており、厳密に議論をするならば、人智学医学は、ホメオパシー療法とは異なる独自の医療体系である。ドイツでも薬学部の教科書には、ホメオパシー療法と人智学医学は別物として扱われている。

たとえ自然治癒力を高める効果のある自然薬による治療であっても岡田は投薬を否定する点は、岡田とシュタイナーの医学観の根本的相違点であるが、両者とも自然の産物（食物や自然薬）の霊が人間の霊に働きかける作用を見いだしている点では共通している。この考えは従来の医薬品や栄養補給のためのサプリメントの定義とも異なるものであり、「新しい医学」における薬の再定義を可能にし、医療薬学を改革することにも繋がっていくであろう。

米山⁴⁴⁾によると、もともと人体は、自己治癒に必要なさまざまな物質を体内で分泌している。医薬品として認知されている人工物質と類似の物質が、最近になって、もともと体内で自然に分泌されていることが発見されたこともある。例えば、狭心症の薬として有名なニトログリセリンは人工物だが、最近、人間の血管の内側からそれに似た構造の物質、体内ニトロとで

^{†6)}ある結果が生じる時には、直接の原因（近因）だけではなく、直接の原因を生じさせた原因やそれ以外のさまざまな間接的な原因（遠因）も含めて、あらゆる存在が互いに関係しあうことで、それらすべての関係性の結果として、ある結果が生じるという考え方。

^{†7)}“似たものは、似たもので治せ”という原理。類似原理は、古くは、ギリシアの医師・ヒポクラテスの著書にも紹介されているといわれるほどの歴史をもっており、彼は、「病の治療には、類似療法と対称療法の２種類の方法がある。」と述べているが、類似原理が一般に脚光を浴びるようになったのは、ドイツの医師ハーネマンが18世紀後半に類似療法（ホメオパシー）を実践するようになってからのこと。

も言うべき一酸化窒素が分泌されており、強力に血管を拡げる作用を担っていることがわかってきた。また、もともと「ジギタリス」というイギリスの民間療法で使われていた薬草は、心不全の治療薬として処方されているが、最近になって、このジギタリスと同じ作用をするE-DLSという物質が、人間の体内で分泌されていることが発見された。このような研究が進捗すれば、人間に本来備わる自然治癒力について解明されたことになり、シュタイナーの提唱する自然治癒力を促進する効用をもつ自然薬による治療であろうと、投薬する必要があるのか再検討されることであろう。

(2) 統合医療の定義

岡田式健康法では、統合医療における位置づけを明確にし、西洋医学との協働、協調を目指しているが、さらに治療・予防・健康増進を一つの理論で実践できる「新しい医学」の創成のための基礎的土台として、

(1) 健康生活ネットワークの確立、(2) 療院の設立、(3) 農医連携の確立を課題として挙げている。人智学医学では(2)と(3)は既にその基礎が完成しており、人智学医学を中心とする総合病院はドイツに3箇所、スイスに6箇所、イタリアに1箇所、スウェーデンに1箇所、イギリスに1箇所設立されている。また、ドイツ各地にはシュタイナーの提唱したバイオダイナミック農業を実施する農場が数多くあり、上記の病院と消費者との連携が効率的にとれている。(1)に関してはヨーロッパでは未開拓領域であるが、やはりシュタイナーの提唱しているヴァルドルフ学校(小中高一貫のシュタナー教育)と幼稚園が、子供の健康管理を人智学医学的観点から実施しており(オイリュトミー授業、芸術治療、バイオダイナミック農業で生産された野菜を調理した給食等)、保護者の多くは病気の際、人智学医学の医者にかかる確率が一般の学校の保護者より高い。しかしながら、病院と地域の治療師と市民が連携して、一人ひとりの患者を全人的に見るようなシステムは存在しない。

人智学医学は、現代医学をそのなかに包含する統合医療そのものであり、限界にある現代医学を拡張し、さらに発展させることができると、自己定義している。ここで注目すべきことは、シュタイナーは西洋医学という言葉は用いず、現代医学(ドイツ語のSchulmedizin

は正確には「大学で教える最新の医学」の意)という言葉を用いている。シュタイナーにとって、医学とはヨーロッパにおいてギリシア時代から自然科学の発展に伴って成立し進化してきた学問であり、それをさらに発展させるのが人智学医学であり、現代医学に対峙するものではないと考えている。つまり、現代医学が進化(evolution)したものが人智学医学であると看做し、革命(revolution)という言葉を使わない。これに対して、岡田は西洋医学という言葉は頻繁に使用することにより、西洋医学と東洋医学という対立概念を相対化させ、東洋思想に基づく「霊的医学」により「(西洋)医学の革命」を起こし、「新しい医学」の創成を目指そうとしている。このようにシュタイナーの医学進化論の背景にはヨーロッパ中心主義が、そして岡田の医学革命論の背景には東洋思想と西洋思想の統合主義(「東西文明の融合」)が垣間見られる。

6. 比較研究から得られた知見と「第三の医学」構築のための課題

岡田式健康法と人智学医学の医学理論の類似性は、岡田とシュタイナーの宇宙・自然・人間観の類似性に起因する。また、両者の相違点を表面的に考察し、どちらがより科学的真実に近く、科学的に証明する価値があるのかという短絡的二元主義的な態度で分析するのではなく、両者とも正しい、という多元主義的な考察に基づいて、両者の相違点が相補的な関係にあり、表面的な相違点を超越したところに新しい視点が見いだされるという統合的分析が不可欠である。本論の結論として、最後に今後の研究課題を三項目に絞って提案する。

6-1 人間の本質に関わる研究：心とアストラル体の本質を解明する新しい心理学的モデルの構築

本論では人間の四本質の分類定義が岡田とシュタイナーでは非常に似通っていることが判明した。岡田の言う「心」は、シュタイナーの「アストラル体」に対応する概念であろう。前者も後者も心(=アストラル体)が精霊(=エーテル体)と魂(=自我組織)の中間に位置する存在として、その重要性を強調しており、

心（アストラル体）が曇り、魂（自我組織）からの光（直感）を遮断し、精霊（エーテル体）の自然治癒力を抑制する、ことを説いている。すなわち、心（アストラル体）をどのような状態に保つかが人間の心身の健康に大きな影響を及ぼすことが指摘されている。精神心理状態と身体との相互作用は心身医学で研究されており、心理状態が身体の状態に影響を与えるという多くの実証的研究結果が発表されている。例えば、笑いやストレスがNK細胞の活性度をはじめとする免疫状態に影響を与えるという発表が行われている。また、思考と行動を改善することで心身の健康に大きな影響を与えることも明らかにされつつある。岡田は宗教的・道徳的観点から説いている人間の思考・感情・行動に関する論文の中で特に心身の健康に関連して感謝報恩、利他愛、善行、自然尊重の重要性を指摘している。このような心（アストラル体）の働きである思考・感情が、精霊（エーテル体）にどのような影響を与え、自然治癒力の促進・抑制につながるかを研究することは、「新しい医学」の基盤となっている「霊科学」における「霊」の実体により、新たな心理学的モデルの構築に貢献することが期待される。

6-2 生理学的研究：非物質が物質化するプロセスの解明

病気の原因である霊の曇りは不純水素である、という岡田の病因説と類似した記述がシュタイナーの論文にも見られることは、前章で詳述した（「炭酸プロセス」、「咲」）。両者の使用している「水素」が、一般の化学元素である水素Hとどこまで一致するものなのかは現在の段階では不明であるが、不純水素という言葉がさまざまな観点から解釈する必要があるであろう。

岡田も述べているように、霊の曇りとは霊的な現象で非物質であるが、それが濃度化したところに超微粒子が発生し、物質化し微生物の卵に変化する。このような非物質の物質化のプロセスに関する研究は、霊の存在の解明にもつながる。

6-3 社会ネットワーク論：統合医療を中心とする社会システムの構築

人智学医学が「統合医療における医学」ではなく、

「統合医療としての医学」であり、現代医学の進化した体系であることが、そのシュタイナーの医学理論の中に見いだされる。このことは、今後の岡田式健康法と統合医療との関係の在り方を構築する際に多くの示唆を与えると考えられる。

岡田式健康法も人智学医学も、人間を全体的に霊的に捉えることを前提としており、医師・治療者と患者という関係の枠組みを越えて、社会的な存在である人間（患者）を社会の中でサポートする社会システムの構築を模索している。岡田式健康法では「健康生活ネットワーク」として、そのシステム構築の中心に、複数の家庭から成立する地域社会での人間関係を据えているのに対し、人智学医学ではヴァルドルフ学校（シュタイナー教育）を中心としたネットワークが既に構築され、そのシステム構築の中心には霊的教育がある。この両者のアプローチは、相補的に概念統合することが可能であり、さらには統合医療という概念を超越した、霊体ともに健全な人間が生活できる社会の創出を可能にする、新しい健康促進システム（「新しい医学」）を生み出す原動力となることができるであろう。このような研究には社会ネットワーク論の貢献が期待される。この理論は、近年の社会学や人類学、組織論といった学問分野において、最新の推論・研究であると同時に、有用な方法として台頭した。この理論を使用した分析によって、家族から国家までさまざまなレベルの問題に適用でき、問題解決への道を示す重要な役割を果たし、組織が運営される際にどの程度個人の追求する目的が果たされるのか、多くの研究者によって論証されている。また、岡田もシュタイナーも既に半世紀以上も前に、大自然の法則に基づくシステム論的な社会ネットワーク論（岡田の「天国化運動^{†8}」、シュタイナーの「社会三層化論^{†9}」）を発表

^{†8} 岡田の天国化運動には、社会の最小単位である家庭を天国化すれば、それが地域、国家、世界の天国化につながるという考えでその根底には、アーサー・ケストラーの提唱したホロン概念に基づくホラーキー組織と同じ思想がある。

^{†9} シュタイナーの提案した社会三層化論は、フランス革命の自由・平等・友愛の理念を発展させ「精神生活における自由」「法律上の平等」「経済生活における友愛」の異なる原則に基づいて運営される社会を理想とする。

しており、今後両論の比較研究が期待される。

謝 辞

本研究は、一般財団法人MOA健康科学センター平成23年度研究助成による研究です。当センターの物質的な面だけではなく精神的な面でのご支援にも心から感謝申し上げます。また、一般社団法人MOAインターナショナル岡田茂吉哲学研究プロジェクトの森省三氏と柚木泰弘氏には、本研究に対して貴重なご意見を頂きました。

[参考文献]

- 1) Universität Witten/Herdecke. Lehrstuhl für Medizintechnik, Integrative und Anthroposophische Medizin. <http://www.uni-wh.de/gesundheits/lehstuhl-medizintechnik/>, (アクセス日：2014年6月30日).
- 2) Wilber K. Integral spirituality. Integral Books. Boston. London. 20. 2006 (訳本：ケン・ウィルバー, (訳者) 松永太郎. インテグラル・スピリチュアリティ. 春秋社. 東京. 30-32. 2008)
- 3) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第2巻. 熱海. 226. 2002
- 4) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 講話篇第1巻. 熱海. 21-22. 2002
- 5) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第2巻. 熱海. 185. 2002
- 6) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第7巻. 熱海. 166-167. 2002
- 7) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第1巻. 熱海. 187. 2002
- 8) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第11巻. 熱海. 214. 2002
- 9) MOAインターナショナル. 岡田式浄化療法2級テキスト 総論編. 116. 2008
- 10) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第9巻. 熱海. 323. 2002
- 11) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第1巻. 熱海. 314. 2002
- 12) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 講話篇第2巻. 熱海. 93. 2002
- 13) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第6巻. 熱海. 257. 2002
- 14) MOAインターナショナル. 岡田式浄化療法2級テキスト 総論編. 93-95. 2008
- 15) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第2巻. 熱海. 162-163. 2002
- 16) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇補巻3. 熱海. 358. 2002
- 17) MOAインターナショナル. 岡田式浄化療法2級テキスト 総論編. 107. 2008
- 18) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第11巻. 熱海. 221-222. 2002
- 19) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第2巻. 熱海. 301. 2002
- 20) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 講話篇第2巻. 熱海. 161-162. 2002
- 21) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第2巻. 熱海. 100-102. 2002
- 22) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第1巻. 熱海. 188. 2002
- 23) MOAインターナショナル. 岡田式浄化療法2級テキスト 総論編. 131-132. 2008
- 24) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第12巻. 熱海. 8. 2002
- 25) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第5巻. 熱海. 154. 2002
- 26) MOAインターナショナル. 岡田式浄化療法2級テキスト 総論編. 132-134. 2008
- 27) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第6巻. 熱海. 101-102. 2002
- 28) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 講話篇第2巻. 熱海. 334-335. 2002
- 29) MOAインターナショナル. 岡田式浄化療法2級テキスト 総論編. 81-84. 2008
- 30) MOAインターナショナル. 岡田式浄化療法2級テキスト 総論編. 71-73. 2008
- 31) Schramm H. Heilmittel der anthroposophischen Medizin: Grundlagen - Arzneimittelporträts - Anwendung. 1. Auflage. Urban & Fischer Verlag.

München. 2009

- 32) Steiner R. Meditative Betrachtungen und Anleitungen zur Vertiefung der Heilkunst: Vorträge für Ärzte und Medizinstudierende. Rudolf Steiner Verlag. Dornach. 1967
- 33) Heusser P. Anthroposophische Medizin und Wissenschaft: Beiträge zu einer integrativen medizinischen Anthropologie. 1. Auflage. Schattauer Verlag. Stuttgart. 2011
- 34) Steiner R. Anthroposophische Menschenkenntnis und Medizin. 2. Auflage. Rudolf Steiner Verlag. Dornach. 1982
- 35) Steiner R. Die Offenbarungen des Karma. 8. Auflage. Rudolf Steiner Verlag. Dornach. 1992
- 36) Steiner R. Geheimwissenschaft im Umriss. Rudolf Steiner Verlag. Dornach. 1910
- 37) Steiner R. Erdenwissen und Himmelerkenntnis. Rudolf Steiner Verlag. Dornach. 1923
- 38) Steiner R. Osterkurs, Fünfter Vortrag. Rudolf Steiner Verlag. Dornach. 1924
- 39) 杉岡良彦. 統合医療と次元的人間論. 医学哲学医学倫理. 27, 13-22. 2009
- 40) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第6巻. 熱海. 256-257. 2002
- 41) ルドルフ・シュタイナー. (訳者) 西川隆範. 病気と治療. イザラ書房. 東京. 111. 1992(原著: Steiner R. Geisteswissenschaftliche Gesichtspunkte zur Therapie. Rudolf Steiner Verlag. Dornach. 1921)
- 42) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第4巻. 熱海. 447. 2002
- 43) 『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第10巻. 熱海. 66. 2002
- 44) 米山公啓. 自然治癒力のミステリー. 法研. 東京. 186-188. 1998

付録. 人智学医学から見た薬物および統合医療に関する解釈

人智学医学では、人間の自然治癒力を抑える薬をどのように扱っているのか。

人智学医学は西洋医学を拡大したものと捉えられており、人智学的観点からの医師の倫理的目的は、患者を誠心誠意、可能な限り助けることにある。ゆえに、人智学医学的な薬も逆症療法[†]的な薬も投与する。慢性疾患の場合は、副作用の強い薬はできるだけ投与しないようにし、人智学医学的な薬を多く投与し、他のセラピーも実施する。しかし、これにも限界があり、自然治癒力は人智学的セラピーでいつも十分に刺激されるとは限らない。さらに自然治癒力にもいろいろある。人間は生物化学的分子プロセスからだけで成り立っているわけでも、機械的に行動をしているわけでもない。人間が単なる機械であるならば、自己治癒作用は存在しない。機械は自分で自分を修理することはできないが、生命体にはできる。物理的・化学的力と物質を超越した特別の生命力によって生命組織の機能が作用していることを裏付ける証拠がある。まずこの生命力から生命組織の自己治癒能力が生じ、魂的で霊的な力が加わり、生命組織にポジティブな影響を与える。これらの力が自己治癒力の源となっている。人間を機械として扱うのではなく、体と魂と霊の合体したものと理解しなければならない。このことは治療にも考慮されなければならない。自然治癒力を抑制する薬と人智学医学の薬の投与がどの程度必要なのかは、この人間観に基づいて判断されなければならない。

例えば、リウマチの場合にはコルチゾンやメソトレキセートのような逆症療法的薬で関節細胞を破壊する炎症プロセスを抑制しつつ、人智学薬品で自然治癒力を高めるようにバランスを取らなければならない。人智学薬品、例えば腎臓の排泄作用と肝臓の解毒作用を高めるような薬草調剤を投与すれば、逆症療法

的薬品の副作用を抑えることができる。また、例えば、向精神剤は、人間の分子レベルでの効果だけでなく、霊魂のレベルでのプロセスにも感応している。逆症療法的薬品も多様な調剤方法が示唆しているように、物理的・化学的効果だけでなく、霊魂のレベルでの効果にも感応する。逆症療法のこのような相互作用は非還元主義的な見方で観察し、直線的な因果関係だけでなく、多様な全人的な考察で研究を進めなければならない。

このように、西洋医学の薬剤治療の存在理由は、人智学医学的な観点から理解し拡大解釈することができる。ここで注目しなければならないのは、人智学医学では霊魂は中枢神経とだけではなく、人間全体に関連しているということである。ゆえに、どの器官にも霊体があり、個人の霊的自我が無意識に貫通している。中枢神経は霊的なものを意識化させる働きをしているだけである。霊的なものが脳だけでなく、人間全体と結びついているという考えは科学でも次第に普及してきており、「霊の体現」と呼ばれている。

人智学医学において目指している西洋医学の拡張の意味するところは、(1) 人間観の拡張と、(2) 治療的・診断的な拡張（例えば生活記録的な病歴記述）である。患者の病気発生に生命力や霊的なものがどのように関与しているか、合理的な全人的観点から見て、治療が肉体だけではなく霊と魂にどのような影響を与えているか研究されている。統合医療とはこのように理解され、霊的に拡大された自然科学的医学のことであり、肉体では物質のプロセスのみが働き、霊と魂では非物質的な霊のプロセスが働いている事実に基づいている。

人智学医学はシュタイナーの輪廻転生とカルマ思想をどのように扱っているのか。

輪廻転生とカルマの考えは一般に非キリスト教的なものと思われている。新約聖書には1箇所だけはっきりとこの考えが書かれているが、この考えは仏教的・ヒンズー教的思想だと思われている。しかし、西洋では過去200年の間に東洋思想とは独立して、輪廻転生とカルマの思想がレッシング、ゲーテ、CFマイヤー、ヘンリー・フォード、シュタイナー等の思想家達によっ

[†] Allopathy の訳。逆症療法とは、患者よりも病気の症状に対処することに重点を置き、主として薬剤で治療する療法。

て形成されてきた。彼らの中でシュタイナーが健康と病気との関連で輪廻転生とカルマについて最も詳細に言及している。シュタイナーによると人間は生と死の間の時間内だけで発達するのではなく、過去の人生と死後生前の霊界生活をも含めて進化する。それぞれの人生において何かを受け入れ、手に入れて、意識的にも無意識的にもそれらを自分のものにする。

人智学的医学から見て統合医療とは何か。

「統合医療」という概念は元々ドイツで使われ始めたが、最近ではアメリカで盛んに使われている。アメリカで使われている「統合医療」は概念的ではなく実用的な統合を意味している。相補代替医療の要素を研究し西洋医学に統合しようというもので、真の統合医療ではなく、さまざまな医療の集合体である。西洋医学と相補代替医療の要素は理解されず、ただ集められているだけである。例えば中国医学の「気」の概念は自然科学的には理解されず、消化しきれなく不可解なものとして看做され、西洋医学の真の統合的要素とはなっていない。これに対して概念的統合とは、たとえ異なった人間観があるとしても、結合可能な要素を真に理解し統一することである。そしてこれが真の統合的な「統合医療」だ。ゆえに、人智学医学ではさまざまな文化に存在する人間の非物質的生命力の概念や表現（気、エーテル体等）を比較研究している。今日では、アリストテレスの人間の四機能説（栄養摂取能力、感覚能力、運動能力、思考能力）に戻ろうという傾向が見られる。このようなモデルは、文化や学問領域によって異なる人間観を統合的に捉えるのに便利である。

人智学医学から見た統合医療には次の特徴がある。

（１）概念的統合：人間の本质を全体的（霊と体との機能的統合体）に理解する。健康と病気は単なる分子間の相互作用ではなく、霊と体の機能の調和・不調和の結果である。

（２）診断的治療的統合：この統合的人間観を具体的に応用する。例えば病歴と診断は肉体と生命と魂と霊の具体的な要因にまで追求し、このさまざまなレベルで効果ある治療を施す。手術や放射線療法は肉体に、薬草や治療オイリュトミーは生命力組織に働きかけ、

抵抗力と自己治癒力を促進し、音楽や絵画療法は魂に働きかけ、人生の意味や霊に関するカウンセリングは自我組織に働きかける。

時代が変われば、同じ意味の言葉も表現が変わる。西洋医学とは一線を引いていた代替医療、全人的医療、西洋医学を補う補完医療、統合医療などがあるが、最終的には統合医療も全人的医療と呼ばれるようになるであろう。

Contrasting German and Japanese Integrative Medicine: The Okada Health and Wellness Program and Anthroposophic Medicine

PD Dr. Kazuma MATOBA¹ and Prof. Dr. Peter HEUSSER²

Abstract

Both the Okada Health and Wellness Program (OHW) and Anthroposophic Medicine (AM) are similar medical concepts that have developed in Japan and Germany, respectively, since the beginning of the 20th century. Both concepts aim to build a “third medicine” by defining their identities and positioning in the context of integrative medicine. This paper gives an overview of the philosophical frameworks of Mokichi Okada and Rudolf Steiner using the Ken Wilber’s integral theory, and compares OHW and AM by focusing on their pathological definitions of health and disease. This paper also looks at the differences and similarities between OHW and AM and highlights how future research can contribute to constructing a new medical theory. Japan and Germany have different medical traditions and social systems that recognize integrative medicine differently. By comparing the concepts of OHW and AM in the historical contexts of both countries, identifying problems to further their development, and enhancing links between OHW and AM, this paper can help create new general values for integrative medicine, and search for universal views of human.

Keywords:

Mokichi Okada, Rudolf Steiner, integrative medicine, Ken Wilber’s integral theory

¹Universität Witten/Herdecke Fakultät für Kulturreflexion, Alfred-Herrhausen-Str. 50, D-58452 Witten, Germany. ²Universität Witten/Herdecke Fakultät für Gesundheit, Alfred-Herrhausen-Str. 50, D-58452 Witten, Germany.

Corresponding author: Kazuma Matoba, Ph.D. TEL: (+49)2302-1797509, E-mail: kazuma.matoba@uni-wh.de

Received 7 January 2013; accepted 22 February 2014.